－所蔵作品紹介－

因藤　壽　INDŌ Hisashi

作品56.11.22－クリマ

さくひん56.11.22-くりま

作品データはこちら

表された色彩は明度の異なるふたつの青灰色のみ。また、要素間の力学関係という意味での構成のゆたかさもない。

当時「北海道の雪深い山村」で暮らしていた作者は初めて東京を訪れた時、そこに「人間の居ない、鉄とガラス、コンクリートでできた砂漠」を見出した。その印象が帰郷後描かれたこの作品のテーマを形成しているのは、一見して納得できよう。

戦後復興期の社会状況に人間の存在を強烈に脅かす側面が潜んでいるという認識、そしてそれをあばき出すという課題は、当時の前衛的リアリズム画家ならば共通して抱いていたものではあった。タイトルの「クリマ（フランス語で風土、環境の意）」も日本人作家としての制作・生活基盤である国や地域の自覚化を目的に、当時さかんに口にされたことばである。そのなかで因藤のこの作品が傑出しているのは、説明的要素をぎりぎりまで切り詰めたことにより、都会の人工物の非人間性を冷厳かつ大胆に提示し得た点にある。

この制作は作者本人にとっても、当時の絵画の常識からさえ不毛と見なされたモノクロームに、強く深い表現を開く可能性があることを確信させた。そして同じ展覧会に発表された黒一色からなる作品〈無〉とともに、今日まで一貫して続けられるモノクローム絵画の出発点となったのである。

因藤壽は北海道稚内市生まれ。1943年から47年まで札幌の北海道大学応用電気研究所（旧超短波研究所）に勤務し、超短波の研究に従事する。1947年からは北海道倶知安町に移り、中学校教員を勤めた。制作を始めたのも1947年からで、まずクレヨンやクレパスで描き、翌年より油彩画を描くようになった。まもなく地元の美術運動に参加し、道展や全道展に発表したほか、1950年代から60年代初めは二科展、読売アンデパンダン展などに出品している。1963年北海道を離れ、大宮市に移った。

*引用は因藤壽＋T.バイルレ・対談「現代の「生」と創造」『六月の風』32号（六月の風会、1979）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より